

人生とは脂と水分が抜けていくことなのかしら

月岡 誠 — 編集者／ライター

『センチメンタルな旅・冬の旅』 荒木経惟／新潮社／1991年



年寄りとは若い頃の刷り込みから抜けられません。サッポロ一番はいつまでも「こんなうまいもの」（◎藤岡琢也）だし、宮崎美子さんは「ピカピカに光って（◎斉藤哲夫）る可愛い小太りな女のコ」です。ので、荒木経惟さんは、「変な髪型して、小汚い感じのするエロい写真を撮る人」です。

この本の前半の新婚旅行ほかの写真、当時とすればとりたてて貧乏くさいわけでもないのでしょうけれども、なんか幸せいっぱいな感じという雰囲気でもありません。新生活のスタートというより、所帯持ちちゃったよ、どうしよう、みたいな。奥さん（陽子さん）のヌードも撮っていますが、エロスというシャレオツな外来語より、「好きだといったらチンチン立ててね、チンチン立てたら好きだと言ってね」（◎まついなつき）という言葉の似合う、生活臭さが漂う、ざらっとした感じといたしますか。

後半の、陽子さんがガンで死に至るまで・そしてその後、の写真は脂が抜けて、粘液がなくなっていく感じです。大きな穴が開いていき、ぽっかり空いちゃったよ、というのをこれでもか的に写して。どうしよう、どうしよう、そして『そうか、もう君はいないのか』（◎城山三郎）に至る、みたいな。

そいでもってラストは二人の愛猫が、雪のベランダではねています。元気だしなよ、生き残っちゃったんだから。アタイは覚えてるぜ、陽子さんをよ、と。

こうして書いてみるとあざとさとスレスレの写真集ですが、不思議とワタシも、看取るもしくは看取られる時になれば、こんなになれるといいな、と思わされます。父親・母親とも手を握ることなく送ってしまったんで、今度はどっちにしてもちゃんと握らないとなあ、とか。そして、その時まではぐちゃぐちゃ、小汚い感じで生きんとなあ、と。これが「小ざっぱり」だと小津安二郎なのかもしれませんが、小汚いでいくつもりです。☐